

シンポジウム「人間の安全保障と私たちの見た世界」

開会挨拶

文教大学学長 拝仙 マイケル

私は人生を通して、平和と安全保障について考えさせられる出来事に度々遭遇してきました。私が生まれた1950年は、冷戦が始まった頃です。そして高校、大学を卒業する時には、ベトナム戦争が激しさを増していました。徴兵の危険性にさらされた私は、戦争というものをいつになく身近に感じ、進路の決定には非常に神経を使いました。また、「冷戦」という実に妙な雰囲気の中で40年も暮らし、その影響を受けて育った私にとって、ソ連という大国の崩壊と、その後の世界秩序の大転換は、到底想像出来ない事でした。

ソ連の崩壊をきっかけに始まった共産主義政権の崩壊は、ルーマニアのチャウシェスク政権崩壊、ベルリンの壁崩壊と東西ドイツの再統一へと続き、ついにソ連が地球上から消え、そこに15の共和国が誕生しました。殆どの専門家が予測出来なかった目まぐるしい出来事の連続でした。そして世界に『新しい秩序』、つまり自由民主主義と資本主義に基づいた政治と経済の仕組みが到来したと、騒がれるようになりました。

世界のいわゆる「新秩序」が構築され始めてから15年ほどが経った今では、民族単位の家が数多く誕生しています。世界地図には確かに、民主主義的な仕組みに基づいた家が多く現れました。第2次世界大戦以前にあったような、民主主義と平和を無視した一党支配や、独裁者による支配、戦争を美化するような指導者や政党はほぼなくなりそうに見えます。しかし、世界は以前より平和になったと言えるでしょうか。民族紛争は激しさを増しています。第2次世界大戦中に起こったような、組織的な大量虐殺や集団殺戮を二度と許してはならないというのは世界中の人々の通念となっている筈ですが、実は1990年以降、自由民主主義に基づくいわゆる「新秩序」の下で、民族紛争が多発してきました。東チモール、ボスニア、ルワンダ、スーダンのダルフルなどです。また、民間人が巻き込まれる紛争や戦争が多くなっています。百年前の戦争では、死傷者の9割以上は軍人でしたが、今はそれが逆転して、9割以上が民間人です。特にひどい例では、そのような民間人の虐殺を犯しているのは兵隊にさせられた10歳から12歳前後の子どもたちです。

世界で起きているこのような悲劇を見るにつけ、無知と偏見がいかに恐ろしいものか身にしみてきます。人々が自由に生きられる社会を作るために必要な知識や、平和を維持するための思想教育がどれほど大切か、痛感させられます。私たち一人一人が自分の国や民族、また外国の文化や歴史について正しい知識を得ることは、住みやすい国、住みやすい世界を作るのに不可欠なのです。

今日のシンポジウムは、このような事を考えるためには絶好の機会であると思います。懸命に学び、世界のいろいろな人々の文化的背景や複雑な利害関係を少しでも理解したうえで、平和への願いを持ち続けること。それが長い間平和を享受し続ける、唯一の道ではないでしょうか。